

ポルトガル語の関係代名詞 *o qual* について

Pronome Relativo *o qual* em Português

坂 東 照 啓
Teruhiro BANDO

1. はじめに

ポルトガル語において、関係詞と呼ばれる語類は、普通、節を何らかの要素と関係づける機能を持ち、それ自身の関係節における役割が、名詞句か前置詞句か、いずれに解釈されるのかによって、関係代名詞と関係副詞に下位区分される。本稿では、その関係代名詞のうち、複合的な形式をとる *o qual* について考察を加え、一つの文法的記述を試みたい。

2. *o qual* の用法に関する一般的記述

一般に、関係代名詞 *o qual* は、先行詞として人・物を表す名詞をとり、その先行詞の性数に従って変化するものと言われている。つまり、*qual* 自体は、数による変化（複数形 *quais*）があるのみだが、単独で関係代名詞として用いられることはなく、常に先行詞である名詞の性数に一致した定冠詞 *o*（男性単数）、*a*（女性単数）、*os*（男性複数）、*as*（女性複数）のいずれかを伴って現れるのである。普通、その定冠詞 *o, a, os, as*（以下、*o* で代表させる）と *qual, quais*（以下、*qual* で代表させる）を組み合わせた形式 *o/a qual, os/as quais*（以下、*o qual* で代表させる）で、一つの関係代名詞とされている。

この関係代名詞 *o qual* について、例えば、伝統的な枠組みに基づく文法書の一つである Cunha & Cintra (1985: 338-340) では、次のような記述が見られる（ただし、例文は省略する）。

1. Nas orações **ADJETIVAS EXPLICATIVAS**, o pronome *que*, com antecedente substantivo, pode ser substituído por *o qual* (*a qual, os quais, as quais*):

.....

2. Esta substituição pode ser um recurso de estilo, isto é, pode ser aconselhada pela clareza, pela eufonia, pelo ritmo do enunciado. Mas há casos em que a língua exige o emprego da forma *o qual*.

Precisando melhor:

a) o **RELATIVO** *que* emprega-se, preferentemente, depois das preposições monossilábicas *a, com, de, em e por*:

.....

b) as demais preposições simples, essenciais ou acidentais, bem como as locuções prepositivas, constroem-se obrigatória ou predominantemente com o pronome *o qual*:

.....⁽¹⁾

これは、関係代名詞 *o qual* に対してなされる記述として、ごく一般的なものであり、他の伝統的な文法書に

おける記述と大きな違いはない。^[2]

簡単にまとめると、o qual は、単に単調さを避けるためだけでなく、que (あるいは quem) と異なり、性数による変化があるという点から、その先行詞を明確にすることができ、さらに、強勢を有することから、強調などの文体的効果を持ちうるのである。また、冠詞・代名詞との縮約形を持たない、主として二音節以上の前置詞、及び複合前置詞を伴う場合には多く、さらには義務的に使用されるが、他方、前置詞を伴わない場合には、制限的關係節を導くことがないといった分布の特徴がある。

ここで、まず注目される点は、o qual という複合的形式であろう。qual が疑問詞として用いられる場合には、o といった要素を伴うことがないにもかかわらず、關係節を導く場合には、それ単独ではなく、必ず定冠詞と共に現れるのである。

3. o qual が導く關係節の2つの型

o qual が導く關係節には、制限用法であるか、非制限用法であるかという相違とは別に、形式的に異なる2つのタイプが存在する。その一つは、次に挙げる例のように、o qual が、關係節において、それ自身名詞句の働きを担っていると考えられうるものであり、これをI型とする。

(1) Visitei o sítio de minha tia, o qual me deixou encantado.

<私はおばの農場を訪ねた。その農場は私をうっとりさせた>

(2) Já houve muitas espécies de elefantes, das quais só restam duas.

<以前、多くの種類の象がいた。そのうち2種類だけが残っている>

(3) Perguntei quantos eram os temas sobre os quais devia falar.

<私は、話さなければならないテーマがいくつあるのか尋ねた>

もう一つの型は、出現することは少ないが、o qual に続き、先行詞を受ける名詞句における名詞 (N_i) が明示され、その全体 (o qual N_i) が關係節における名詞句として解釈されうるものである。これをII型とし、その例として次のようなものが挙げられる。

(4) Li apenas um romance nas férias; o qual romance, aliás, pouco me agradou. (Celso Pedro Luft, *Moderna Gramática Brasileira*, 122)

<私は休暇中にわずか一つの小説を読んだ。その小説は、しかしながら、あまりおもしろくなかった>

(5) Não vi o menino, o qual menino os colegas procuram. (Evanildo Bechara, *Moderna Gramática Portuguesa*, 100)

<私はその少年を見なかった。その少年を仲間たちはさがす>

(6) Sou um retardado sexual, perseguido pela beleza de minha mãe, a qual beleza herdei. (Antônio Callado, *Bar Don Juan*)

<私は母の美しさに悩まされ、性的に遅れている。その母の美しさを私は受け継いだ>

なお、いわゆる前文の内容を受ける關係節は、o qual ではなく、o que によって導入される。

4. qual の生起する位置とその文法的解釈

4.1. 名詞句としての o qual/o qual N_i

I型の *o qual* とII型の *o qual N_i* は、いずれも、関係節 (RCI) の中で名詞句 (NP) として機能する (Prep = 前置詞)。

(7) i. [RCI (Prep) [NP *o qual*] ...]

ii. [RCI (Prep) [NP *o qual N_i*] ...]

このように関係詞化されるもとなった名詞句としては、(8)が考えられる (Det = 限定詞)。

(8) [NP Det N_i]

普通、定形の従属節は、その最初に、従属的地位を示す何らかの標識を持つ。具体的には、従属接続詞、あるいはそれと同等の働きを併せ持つと解釈される *qu-* 語のことであり、関係節の場合、後者が標識となる。⁽³⁾ そこで、関係節は、次のような構造を基底として形成されているものと考えられる。

(9) [RCI (Prep) [NP *qu- o N_i*] ...]

この(9)における名詞句 [*qu- o N_i*] が、文法的・文体的要因によって、特定の関係代名詞 (あるいは、関係詞を含む名詞句) に置き換えられているとみなされる。

しかし、関係節の最初、または、前置詞の直後の位置には、*qu-* 語として *qual* が現れることはない。つまり、次のような形は見ることができない。

(10) i. *[RCI (Prep) [NP *qual o*] ...]

ii. *[RCI (Prep) [NP *qual o N_i*] ...]

que が、名詞句 [*qu- o N_i*] 全体と置き換わっていると考えられるのに対し、*qual* の場合、*o* または *o N_i* が残っているだけでなく、*qual* の位置も(7)のように定冠詞の後なのである。こうした統語的特徴は、どのように説明されうるのだろうか。

関係節の標識となっている *qual* が、I型、II型のいずれにおいても、*o* の次に現れるということには、その *qual* 自身が担っている何らかの機能に関連があると考えられる。そこでまず、関係節中の名詞句として機能するII型の *o qual N_i* を、ポルトガル語における名詞句一般の構造と対照すると、*qual* は、*N_i* を修飾する形容詞と考えられる。他方、I型における *qual* については、それによって修飾されるような名詞が存在せず、II型の *qual* とは異なる文法的解釈がなされるかのように見える。

4.2. *o qual* と *o qual N_i* の関連

II型での *qual* は、前節で述べたように、形容詞と考えられるのだが、名詞句を構成する普通の語順が「冠詞—名詞—形容詞」であるから、次のような構造がII型の基本と考えられる。

(11) [RCI (Prep) [NP *o N_i qual*] ...]

実際には、(11)のような形式は現れない。しかし、(11)は、II型のみならず、I型の基底的な構造としても考えられるものである。つまり、I型の場合、名詞句 [*o N_i qual*] における *N_i* が省略された形式とみなしうるのである。実際、*N_i* のように、既出の名詞であれば、省略され、冠詞と形容詞 (相当句・節) のみ現れるということが、ポルトガル語の名詞句一般に見られる。⁽⁴⁾ 名詞の省略は、次のような例において観察される。

(12) O relógio dele está certo mas o meu está atrasado. (o relógio)

<彼の時計は正しいが、私のは遅れている>

(13) O muro era baixo a separar o seu quintal do de Dona Arminha. (o quintal)

<壁は、彼の庭をアルミーニャさんのから分けるには、低かった>

(14) *Apenas em 1249 Portugal ficou com os limites aproximados dos que hoje tem. (os limites)*

＜ポルトガルは、ようやく1249年に、今日持つのとほぼ同じ国境線を描いた＞

従って、I型における *qual* も、基底では形容詞と考えられうるものであり、(14)は *o qual* が導く関係節の基本構造と考えられる。しかし、 N_i が省略されない場合、なぜ、(14)そのものではなく、II型のように *qual* が N_i に前置された形になるのであろうか。

4.3. *qual* の不定的意味

o qual/o qual N_i は、関係節の中で名詞句としての働きも有すると考えられ、 N_i が省略されないII型では、*qual* は、表層においても形宿詞とみなされる。ところが、その *qual* は N_i の前に位置する。この語順は、ポルトガル語の一般的な形容詞が、その修飾する名詞の後に生起するということには反している。しかし、形容詞の中でも、不定形容詞は名詞の前に置かれるのが普通である。それでは、この *qual* も、不定形容詞の一つと考えられうるものなのだろうか。

qual は、*que* や *quem* などと同様に、歴史的に疑問—不定詞 (*interrogativo-indefinitivo*) であって、その関係詞としての用法は、後に発達したものである。そうすると、関係詞としての *qual* から、何らかの「不定」の意味を見出しうる可能性はある。そこで、実際の例文を見ることにする。

(15) *Levarei alguns livros na viagem, com os quais pretendo encher o tempo.*

＜私は旅に数冊の本を持っていきます。その本で時を過ごすつもりです＞

(15)において、*os quais* が導く関係節は、先行詞の *alguns livros* によって指示されるものについて、それが「どんな本であるのか」ということを述べていると考えられる。ここで注目したい点は、その「どんな」という言い方であり、そこには一種の「疑問」の意味が含まれていると言える。ここに、疑問—不定詞が、関係詞として用いられるようになった要因があり、現代における関係詞の意味も、その原義である疑問—不定詞としての意味に繋がっていると考えられる。

先行詞によって指示されるものが、「疑問」であるということは、その確認・確定のために、何らかの情報が求められているということである。換言するなら、先行詞の指示するものが、いまだ「不定」なのであって、そのことを関係詞は表しているのである。⁵⁾ このように考えると、名詞句を構成する *o qual N_i* における *qual* についても、不定形容詞の一つとみなしうるであろう。

5. *o qual* が用いられる場合と *qual* の語義——*que* と比較して

関係代名詞の *o qual* と *que* (あるいは、*quem*) の使い分けについては、ある程度まで文体的な問題とされている。しかし、関係節が制限的であるか非制限的であるか、また、関係代名詞が、関係節において、前置詞の補語として解釈されうるものであるか、さらに、その場合の前置詞はどのようなものなのかといった点によって、それぞれの分布に特徴・制限も存在するようである。

5.1. *o qual* の導く制限的關係節と非制限的關係節

制限的關係節において、関係代名詞が前置詞の補語以外の機能を担うと解釈される場合には、(16ii) (17ii) のように、*o qual* がその関係代名詞として用いられることはない。

(16) i. *Ele gostou da casa que eu comprei.*

- ii. *Ele gostou da casa a qual eu comprei.

<彼は、私を買った家を気に入った>

- (17) i. Os animais que se alimentam de carne chamam-se carnívoros.

- ii. *Os animais os quais se alimentam de carne chamam-se carnívoros.

<肉を常食とする動物は、肉食動物と呼ばれる>

(16ii) (17ii) が不適格であるのに対し、関係代名詞が、制限的關係節において、前置詞の補語と解釈されうる場合、さらに、非制限的關係節であれば、そのような条件なしに o qual は使用されうる。このことは、一見、説明の困難な現象に思われる。しかしながら、o qual が使用されうる制限的關係節と非制限的關係節には、明らかな共通点がある。それは、o qual が、制限的關係節で用いられる場合には、その先行詞とは前置詞によって隔てられており、また、非制限的關係節で用いられる場合にも、その關係節自体が独立した音調単位を成すため、先行詞との間は、前置詞がなくとも、ポーズによって隔てられている。すなわち、o qual は、いかなる場合においても、先行詞とは密着することなく、間接的にしか結びつかないのである。

それでは、なぜ、o qual が先行詞に直接して続くことができないのであろうか。これは、關係節が先行詞に従属性の高い制限用法であれば、先行詞の直後に、それを受ける名詞句の定冠詞をわざわざ明示することは、不必要だけでなく、意味上緊密に結びつく先行詞と關係節を、形式上分断してしまうためと考えられる。

5.2. qual の指示の特殊性

o qual は、また、前文の内容を先行詞とすると一般に言われているような關係節を導くこともない。この場合の關係節は、もっぱら o que によって導入される。

- (18) i. Maria estuda agora, o que me surpreende.

- ii. *Maria estuda agora, o qual me surpreende.

<マリアは今勉強しています。それは私を驚かせることです>

(18ii) のような文が普通でない理由は、何であらうか。まず、ここでの從屬節における最初の要素 o が、定冠詞ではなく、いわゆる中性代名詞であるということが指摘されうる。つまり、ここでの o は、無変化の代名詞であり、何らかの名詞がその後省略されているとは考えられない。

適格である (18i) において、その中性代名詞である o は、続く que に導かれる (自由) 關係節と同格關係にあり、これが示すものを指示していると考えられる。そこで問題は、なぜ qual が、que と異なり、中性代名詞 o と同格の關係節を導くような要素として生起しないのか、ということになる。この理由として、そもそも qual という語には、既出の名詞句によって指示されているものを指すという意味があるため、(18ii) のように、qual 自身の指示する対象と同じ対象を指示する名詞句が、先行箇所のないような場合は、用いられないと考えられる。実際、(19ii) のような例も不適格である。

- (19) i. O que Ângela escreve pode ser lido em voz alta.

- ii. *O qual Ângela escreve pode ser lido em voz alta.

<アンジェラが書くことは、朗読されうる>

(19i) の文頭の o は、que が導く關係節と同格關係にあり、これが示すものを指示対象とする中性代名詞と考えられる。しかし、ここでも (19ii) のように、qual を que の代わりに用いると不適格となる。

さらに qual は、疑問詞として用いられる次のような例からも、その指示には限定性があると考えられる。

- (20) i. Destes relógios, qual prefere?
ii. *Destes relógios, que prefere?

<これらの時計の中で、あなたはどれが好きですか>

(20i) における qual は、疑問詞で、不特定の意味を持つが、estes relógios が指示している対象を、自らの指示対象としていると言える。⁶⁾ ここで、(20ii) のように、que が qual の代わりに用いられることはない。つまり、que は、先行箇所、指示対象がそれと同一である名詞句が存在すれば、用いられることはなく、テキストの先行部分では限定されていない対象を指すものと考えられる。

5.3. o qual の導く関係節と que の導く関係節が定冠詞に後続する場合

qual は、先行詞を受ける名詞句における定冠詞を常に伴い、それとの複合形で関係代名詞として機能する。しかし、que の場合、そうした定冠詞を伴って、関係代名詞の機能を持つことはない。

- (21) i. Posso saber o motivo pelo qual desistiu do concurso?
ii. *Posso saber o motivo pelo que desistiu do concurso?

<あなたが競争をやめた動機を知ることができますか>

(21i) の関係節では、先行詞を受ける名詞句として考えられる [o motivo] のうち、o が明示され、motivo が省略されていると分析される。この明示されている o と省略されている motivo が構成する名詞句の指示対象と、qual が指示する対象は同一であって、表層において、o と qual は同格の関係にあると考えられる。ここで、(21ii) のように、直前の o と同一の対象を指示する qual に代えて、que が用いられることはない。これは、que が、先行部分に存在する語句が指示する対象と同じ対象は、指示しえないためと考えられる。

それでは、(2) のような例における o とそれに続く que は、どうであろうか。

- (22) Este carro é o que ele quer.

<この車は、彼が欲しがっている車です>

(22) における述部の o は定冠詞であり、その後、主部において既出の名詞 carro が省略されているとみなされる。しかし、この述部における定冠詞と省略されているとみなされる名詞は、関係節の先行詞を受ける名詞句を構成するようなものではなく、後方照応的定冠詞と、que が導く関係節を被修飾要素とする、統語論的なゼロの代用辞と考えられるものである。つまり、先行する名詞句 [este carro] のうち、名詞 carro のみを引き継ぐゼロの代用辞が、それに続く関係節の先行詞であり、表層において、o は、que が導く関係節全体と同格の関係にあると解釈されうるのである。

ここで、(23) のように、qual が、(22) における que に代わって用いられることはない。

- (23) *Este carro é o qual ele quer.

(23) が不適格であるのは、qual の指示する対象と同じ対象を指すような名詞句が、先行箇所に、存在しないためと考えられる。

6. 結論にかえて

関係節が導入される場合、先行詞を受ける名詞句として考えられる [定冠詞+名詞] のうち、定冠詞が関係節において明示されると、qual が生起し、その定冠詞との複合形 o qual で関係代名詞の機能を持つ。qual には、既出の名詞句が指示している対象を指す意味があり、ここでは、先行詞を受ける名詞句と同一の対象を指示する

と考えられる。関係代名詞を構成する *o* と *qual* は、表層において、同格関係にあると考えられるが、その基本となる構造は、*o qual N_i* が関係節を導くこともありうることから考えると、[定冠詞 + *N_i* + *qual*] であり、ここでの *qual* という語自体は、一種の不定形容詞と解釈されうる。

注

- (1) 前置詞 (*preposições*) は、普通、単一前置詞 (*preposições simples*) と複合前置詞 (*preposições compostas*) に、そして、前者はさらに、本質的前置詞 (*preposições essenciais*) と非本質的前置詞 (*preposições acidentais*) に分類される。本質的前置詞が、もっぱら前置詞として用いられるものであるのに対し、非本質的前置詞は、通常、他の語類に属すると考えられるものである。
- (2) Cunha & Cintra (1985: 338-340) では、関係詞 *qual*, *o qual* の用法として、さらに、部分語 (*partitivo*)、不定語 (*indefinido*) が挙げられている。
- (3) *qu-* 語とは、いわゆる疑問詞・関係詞のことである。ただし、綴り字として *qu-* を持たない語もあり、また、従属接続詞と重複するものもある。
- (4) 名詞句における名詞が、冠詞と形容詞(所有形容詞は除く)を残して省略されている場合、その冠詞は、一般に、代名詞的用法の冠詞、あるいは指示代名詞と呼ばれる。
- (5) ここでの考察は、*qual* だけではなく、関係詞一般についてなされるものである。
- (6) (20i) に対し、*Qual é seu gravador?* <あなたのテープレコーダーはどれですか> のように、*qual* の指示対象と同じ対象を指示するような名詞句が、先行部分に現れていない場合もある。しかし、この場合も、*qual* の指示対象と言いうる、選択される対象は、場面から限定されている。

参考文献

- Ali. M. Said. (1964): *Gramática Histórica da Língua Portuguesa*, Edições Melhoramentos, São Paulo.
- Bechara, Evanildo. (1987): *Moderna Gramática Portuguesa*, Companhia Ed. Nacional, São Paulo.
- Câmara Jr., J. Mattoso. (1985): *História e Estrutura da Língua Portuguesa*, Padrão, Rio de Janeiro.
- Cunha, Celso. e Luís F. Lindley Cintra. (1985): *Nova Gramática do Português Contemporâneo*, Nova Fronteira, Rio de Janeiro.
- Fabb, Nigel. (1990): "The difference between English restrictive and nonrestrictive relative clause", in *Journal of Linguistics* 26, pp. 57-78.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. (1976): *Cohesion in English*, Longman, London.
- Hudson, Richard. (1986): *Word Grammar*, Basil Blackwell, Oxford.
- 菊地 朗, (1990): 「独立文となった非制限的關係節」『英語青年』第136巻1号, p. 23.
- 児玉徳美, (1987): 『依存文法の研究』研究社, 東京。
- 黒川泰男・小山内洸・早川 勇, (1985): 『英文法の新しい考え方学び方』三友社, 東京。
- Luft, Celso Pedro. (1986): *Moderna Gramática Brasileira*, Globo, Rio de Janeiro.
- 長原幸雄, (1990): 『関係節』新英文法選書8, 大修館, 東京。
- 大田 朗・池谷 朗・村田勇三郎, (1987): 『文法論 I』英語学大系3, 大修館, 東京。
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓, (1988): 『言語の構造——理論と分析——意味・統語篇』くろしお出版, 東京。
- 鳥居次好・黒川泰男(監修), (1983): 『教育英文法の基礎——語彙・品詞論の見直し——』三友社, 東京。

[付記]

本稿は、日本ロマンス語学会第27回大会(1990年5月20日、於京都産業大学)において口頭発表した内容に、加筆、訂正を加えたものである。